

就労
障がい者と

Yonezawa Ryou
米澤 諒
(ニッポンランナーズ)

ID陸上でアジア新記録の自信!!

職場とスポンサー契約で
東京パラリンピックに

挑む

知的障がいの陸上界に彗星のごとく登場した米澤諒。

大会に出場するたび新記録を樹立している。

今年春からはアスリート雇用となり、スポーツが仕事になった。

競技環境がまだ充分には整っていない知的障がいカテゴリーにおいて、

トップアスリートへの道を拓き疾走する。

取材・文・写真／安藤啓一
text & photo : Keichi ANDO

アジア新記録で優勝 大躍進のスプリンター

今年7月に開催された関東パラ陸上競技選手権大会（東京・町田）の800mを1分55秒65のアジア新記録で優勝。知的障がい者のT20クラスで東京パラリンピック出場に挑戦する米澤諒の存在を強く印象づけた。

4月に勤務先である株式会社エスパールプラスとスポンサー契約を結び練習環境が整つたばかりだが、早くもアジア新記録という結果を出してみせた。

米澤の才能を最初に見出したのは、米澤が専間に通っていた知的障がい者施設の職員だった。

「京成佐倉駅から続く坂道を

ものすごい勢いで駆け上がって
いる」

その姿が気になつた特定非営利活動法人木ようの家の工藤氏は、陸上の練習に誘つてみた。

米澤のデビュー戦は2013年、高校2年生のときに出場した佐倉マラソンの10km。1人だとコースの途中で道に迷つてしまふのではと心配した米澤の母は、陸上の県大会で活躍した姉に伴走を頼んだ。ところが米澤は、その姉を振り切るようにゴールまで疾走した。

2014年からはトラック種目に取り組み始め、千葉県障がい者スポーツ大会の800mに

出場して3位。全国大会への代表枠2名には惜しくも届かなかつた。



障がい者アスリートの採用に企業が熱心でなかった頃から、苦心して築いてきた土台があつたからこそ「カミカゼ」の恩恵を十分受けることができたのだ。

ようやく事業は軌道に乗つた。2018年のリオ大会には、就職支援した障がい者アスリートが多数出場。銅メダルを獲得したウィルチエアーラグビーの選手の半数以上は、同社が就職支援した人たちだった。

現地で毎日応援した竹内さん。

「3位決定戦は」感動しま

した。スポーツの試合を観て感動して涙を流したのは、あれが初めてだったかもしれない。そんな竹内さんに事業を進めうえでの悩みを聞いてみると、意外な答えが返ってきた。「企業のオフィスが貨物物件だと、トイレなどが改修できないう場合があるんですよ」就労を望むアスリートがいて、歓迎する企業があるのに、オフィスで車椅子などの利用ができるように採用をあきらめざるを得ない場合があるというのだ。



つなひろワールドが就職支援をした藤本怜央選手（車椅子バスケットボール・上）と島川慎一選手（ウィルチエアーラグビー・下）

将来の夢、そして希望 開拓者が語った

竹内さんに今後の夢や目標を

聞くと「東京パラリンピックに、就職支援したアスリートが50名以上参加することですね」との力強い言葉が返ってきた。また、その中から金メダリストが出でほしいし、いろいろな競技を支援したいという気持ちから、パラリンピック種目の8割に自社が支援したアスリートを出場させたい、ともいう。目標達成の「自信はある」そうだ。

竹内さんの目は、その先も見据えていた。東京大会で燃え上がった機運をさらに発展させ、障がい者アスリートにとってよりよい環境をつくり、障がい者雇用への関心を高めたい。そんな希望を胸に抱いている。

竹内さんは「一生、パラスポーツと関わっていきたい」とも語る。趣味の車いすソフトボ

ーで、歓迎する企業があるのに、オフィスで車椅子などの利用ができるように採用をあきらめざるを得ない場合があるというのだ。

ラリンピック種目の8割に自社が支援したアスリートを出場させたい、ともいう。目標達成の「自信はある」そうだ。

竹内さんの目は、その先も見据えていた。東京大会で燃え上がった機運をさらに発展させ、障がい者アスリートにとってよりよい環境をつくり、障がい者雇用への関心を高めたい。そんな希望を胸に抱いている。

竹内さんは「一生、パラスポーツと関わっていきたい」とも語る。趣味の車いすソフトボ



自らも車いすソフトボールで汗を流す

と、いたずらっぽく微笑んだ。障がい者アスリートの雇用支援という新たな地平を切り拓いた竹内さん。今後も爽やかな笑みを浮かべながら信じる道を進んでいくだろう。大好きなパラスポーツの発展のために。

最後に竹内さんは、「障がい者アスリートの多くのが練習場所に困っているから、老後は『つなひろワールドアリーナ』とかい

る」と、いたずらっぽく微笑んだ。

障がい者アスリートの雇用支

援という新たな地平を切り拓いた竹内さん。今後も爽やかな笑

みを浮かべながら信じる道を進んでいくだろう。大好きなパラ

スポーツの発展のために。

全国陸上大会から国際大会へ 自信が引き出す潜在能力

高校卒業後は、佐倉市役所のチャレンジドオフィスさくらで仕事をしながらトレーニングに励んできた。これは2年間、一般企業への就職に向けて取り組む就労支援制度だ。

そして2017年、国際大会で初めて経験。バンコクで開催された「NAS世界陸上選手権」で優勝した。また、全国高等学校定期通信制体育大会では、800mで2分01秒34。銀メダルだった。「これは一般的な校陸上部の中では目立つて速い記録だ。

全力疾走する米澤の姿を目の当たりにして、「親の期待は高まりましたよ」と米澤の父。本人が競技に集中できる環境づくりに両親は奔走はじめた。

「外国の選手はものすごく速かったです。もっと練習をがんばらないと勝てない」と米澤。それから約1年後、今年6月に開催された関東パラ大会をアジア新記録で優勝する。この大躍進について、現在指導しているニッポンランナーズの萩谷正紀コーチは、「技術的なことも少しづつ改善してきました。(どうに知的障がいの選手では)成績とメンタルはかなり関係があります。800mについては、本人も自信がついたと思います」

今シーズンは本格的なトレーニングの成果が記録につながった。しかし東京パラリンピックには、せっかく自信をつけた800m種目がない。そこで、昨年から400mへの転向を進



高校を卒業した米澤諒は、ニッポンランナーズのコーチ、萩谷正紀さんとの二人三脚で東京パラリンピックに挑戦する。就職先からアスリート活動への支援が得られて、海外レースにも積極的に参加。400mの強化がこれからの課題だ

がいの特性から、自分で加減を調整しにくい。すべて全力で取り組むものだから、コーチや家族はコンディショニングにも気を配っている。

米澤の母は、「栄養のことや睡眠時間は気をつかっています。ただもう社会人になったのであまり口出しはしません」と見守っている。

「陸上競技をはじめてから、とてもしっかりときました。静岡で行われる強化合宿にも東京駅から一人で行っています」と、米澤の父もその成長を実感。「家族としても、彼のいろいろな面に気がつきました。アスリートとしてだけではなく、これから先も彼は一人で社会で生きていかなければならぬ。そういうことも含めて、今はとても多くのことを学んでいます」

陸上をはじめることでコーチや今の職場とも出会い、1人の大人として自立していくすべを得た。「東京パラリンピックに出席します」と答える米澤。知的障がいを持ちながら自分の人生を歩んでいく勇気と自信をスポーツがプレゼントしてくれた。

福祉農園エスプールプラスに勤務。午後の練習を会社がサポート

米澤の職場であるエスプールプラスは、企業に向けて障がい者雇用の職場として貸し農園を運営しており、その運営スタッフとして勤務する。千葉県と愛知県にある農園には大手企業を含めて200社が参画。1000名以上の障がい者一般就労を実現した。参画企業は農場をノーマライゼーション社員研修やCSRに活用している。生産した野菜は外部販売せず、参画企業の職場などに届けられて、それは社員のコミットメント向上にもつながっている。社長の和田一紀さんは「地域の自治体や福祉団体と一緒に障がい者の働ける場所をつくりたい」と話す。米澤は初のアスリート雇用。「競技活動は本人が引退するまで、東京パラリンピック後もサポートします」

エスプールプラスのアスリート雇用に関する問い合わせは 事業本部 ☎03-6859-6555(星田)まで



今年の4月からは、午前中は仕事をして、午後から練習という毎日だ。そして週末は試合が強化合宿ということが多い。障

スポーツで社会へと羽ばたく
得意の800mでは、全力で走りきり、ゴールするとそのまま倒れ込むことが多い。それが400mは、余裕を残してままレースを終えてしまつ。米澤は、「400mは最初から最後まで、力を出し切ることがあります。フレイジングも心配です」と話す。自分の走力を「コントロールできずに悩んでいます」

めているところだ。
「400mを51秒台で走る実力はあるのだけれど、試合でそれを出せていません」
「指導法が難しいです。最初の100mは加速して、中盤はリラックスする。そこからさらに加速していくというような難しい指示では伝わらない。800mのときもそうでしたが、400mに自信を持てればいいのですが」